

古田元夫先生を送る

井 坂 理 穂

古田先生には学部時代からお世話になっていたこともあり、この原稿に何を書こうかと考えはじめたとたん、昔のさまざまな場面や言葉、印象などが次々に蘇ってきた。そのうちのひとつに、大学院生のときであろうか、電車のなかで出版されたばかりの『知の技法』（小林康夫・船曳建夫編、東京大学出版会、1994年）に含まれていた古田先生の文章を読んでいて、「ああ、古田先生らしいなあ」と強く感じたという記憶がある。なぜか妙にはっきりと覚えているのだが、それは帰宅途中のやや混みあった車両のなかで、吊革につかまり、顔をあげて薄暗くなった外の景色を眺めながら、「いかにも古田先生だなあ」と思ったのだった。しかし、なぜそのとき「古田先生らしい」と感じたのかが思い出せず、先日、久しぶりにその「アクチュアリティ——『難民』報道の落とし穴」という文章を読んでみた。そして改めて、そういうことだったのか、と思った。

ここで先生が書かれていたのは、1989年に日本に「ベトナム難民」が次々に漂着するという事件が起きたときの新聞報道と、この事件の複雑な背景についてである。漂着した人々は、当初は「難民」として受け入れられるかに思われたのだが、まもなく実は中国から来た人々であることがわかり、一転して「偽装難民」「不法入国者」として扱われることになる。ところがこの話にはさらなるどんでん返しがある。彼らがどのような人々であるのかをさぐっていくと、ベトナムと中国との関係の歴史的推移のために、彼らが「ベトナム人」であるのか「中国人」であるのかは必ずしも明確ではないことが明らかになるのである。ここから議論は、「難民」と「不法入国者」という区分の意味や、「難民」と「国籍」の問題を重ねあわせることへの疑問へと発展していく。

この文章を読んで「古田先生らしい」と感じた理由は、おそらく複数あっただろう。一見、そこで説明が終わるかに思えるところで、話をもう一度ひっくり返すという効果的な手法や、授業での先生を思わせる柔らかな語り口、そして何といてもベトナム地域研究者としてのこの地域に対する深い思いと理解、ということがあったにちがいない。しかし、今読んでみると、明らかに先生らしいところは他にもある。たとえば、この事件をめぐるマスコミ報道についての回想部分である。事件が発生したときに、先生のもとにはマスコミ各社から問い合わせが寄せられるのだが、漂着してきた人々は「ベトナム人」と称しているもののベトナム語が流暢な人が少なく、「ベトナム人」であるかどうか当初は不明なままであった。先生の側でも、この段階では「ベトナム人」であるか

否かを断定できる根拠はないとしか答えようがなく、しかしそれでは記者のほうでは記事の書きようがないことから、「もしかりにベトナム人であった場合には」という前提でコメントをされた。ところがこのコメントが新聞記事になったときには、この前提の部分は触れられずに、「専門家」である先生が、日本に「ベトナム難民」が来ても不思議ではないと述べた、という主旨の内容になっていたのである。いかにも先生らしいのは、この一件について先生がマスコミの報道を責めずに、専ら自らの責任を語られている点である。すなわち、客観的には自分も当時の「漂着難民」＝「ベトナム人」説を補完する役割を果たしたわけであるとして、「研究者としては大いに恥じ入るところ」であり、「この点に関しては全く自己弁護をするつもりはありません」とまで書かれているのである。

学生時代にもぼんやりと感じていたのであろうが、駒場に就職して恐れ多くも「同僚」という立場になってから、より明確に感じるようになったことがある。それは、古田先生は周囲で起こる様々な問題や混乱、誤解を、ご自身のなかにまるごと吸い込まれ、それらを自らの責任として消化してしまうことで問題を解決している、ということである。それによって問題が見事に解決されるために、人々は困ったことがあると先生のもとを訪れ、先生はそのためにどんどんとお忙しくなり、学内行政におけるポストはみるみるうちにより重いものへと変化していった。学内の諸問題を次々と吸い込むことは、先生のお体にも大きな負担となっていたに違いない。会議などの場で、独特の口調で、「私の不徳のいたすところで」「たいへんご迷惑をおかけし」などと、ご自身の責任ではないと思われることについて謝罪されるところを、これまでに何度みてきたことだろう。学生、教員、研究者、事務室の方々、どの立場の人と話していても、古田先生の話になると、いかに自分がお世話になったか、いかに先生が誰々を助けていたか、といったエピソードが出てくるのだった。

大学行政に追われる日々を、淡々と受け入れているように傍目には見えていても、先生はこの間、ご自身のやりたいことを随分と我慢され、それを我慢しているということ意識することすらも我慢されていたのではないか、と思うときがある。『ドイモイの誕生——ベトナムにおける改革路線の形成過程』（青木書店、2009年）のあとがきには、この本を準備されるにあたって、当時本学の副学長をしていた古田先生が、総長にこのポストを降りたい旨を伝えられた際のやりとりが書かれている。総長から「副学長を降りて何をやりたいの」と尋ねられた先生は、「注がついている本を書きたいので」と答えたという。これを読んだときには、そのお人柄に甘えて、我々は随分と先生に無理を強いてしまったのではないか、と思わされた。『ドイモイの誕生』は、共産党の資料、回想録、研究書、さらにご自身による関係者へのインタビューにもとづいて書かれており、この時代のベトナムを研究者として見続けてきた先生ならではの詳細で躍動感あふれる著作となっている。そこには学内行政でお忙しい生活のなかで、早くこの本をまとめたいと望んでいらしたにちがいない先生の強い思いが感じられる。

『ドイモイの誕生』を読んでさらに思うのは、我々が古田先生に甘えてしまったのは、どれほどお忙しい状況にあっても先生が研究を続け、成果を出し続けていらしたためもあったのだろう、ということである。業績リストに記された数多くの著作をみても、講演や報告を聞いていても、学内の状況を知らない人々には、とても先生が研究以外の仕事に膨大な時間を費やされていることは想像できないであろう。古田先生といえばベトナム、という組み合わせは、もはやそれ以外の組み合わせを考えるのが難しいほど自然なものとなっているのだが、先生がこの地域を専門として選ばれたそもその理由は、ご著書『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』（東京大学出版会、1995年）のなかで書かれているように、先生の学生時代がベトナム戦争の時代と重なっていたことにある。「ベトナムを中心に世界がまわっているのだから、ベトナムを理解できれば世界のことも分かるであろう」と思っていた、と書かれているが、この研究動機についての思い出は、昔から「なぜベトナム研究の道に進まれたのですか？」という質問が学生から出るたびに、先生が笑いながら話されていたものである。ベトナムを通じて世界を知る、という意識は、『ベトナムの世界史』はもとより、その他の著作にも明確に表れている。それらのなかからは、ベトナムという地域の特性、地域の「におい」が伝わってくると同時に、対象地域に関するテーマを論じながら、「世界史的な問題の展開を、常に発見し検討していく」という姿勢を感じ取ることができ、そのことが先生のベトナム研究をより一層魅力的なものとしている。先生の業績は国内はもちろんのこと、ベトナムでも高く評価されており、ベトナム国家大学ハノイ校名誉博士号、ベトナム社会主義共和国科学技術国家賞、ベトナム社会主義共和国友好勲章などを次々と授与されていたことにも触れておきたい。地域研究者として、対象地域において評価を受けるということが、どれほど大きな意味をもつかはいうまでもないだろう。

先生のそうした魅力あふれる研究は、そのお人柄とともに、数多くの学生を先生のもとに呼び込んだ。活気に満ちた古田ゼミからは、現在、全国各地の研究機関で活躍している優れた東南アジア研究者たちが誕生した。授業においても論文指導においても、先生は常に柔らかな口調で笑いを交えながら、しかし学生の言わんとするところを的確に理解し、核心をつく鋭い質問を投げかけられていた。その尋ね方がまた巧みで、学生が答えに詰まっているときには、「それでは、〇〇さんのお考えは、これから申し上げるふたつの見方のうち、どちらにより近いでしょうか」といったかたちで、具体的な選択肢を提示する。そうすると学生のほうは、到底答えられそうになかった問いに対しても、口を開ききっかけをつかむことができ、話している過程で頭のなかにあった曖昧模糊とした考えに明確な言葉を与えられるようになるのである。

今、まさに激動期にある駒場から、まもなく古田先生が去られることに、大きな不安や寂しさを感じている人々は少なくないだろう。しかし先生ご自身にとっては、学内業務から解放されたところで、研究はもとより、おやりになりたいことが（釣りも含め）山

のようにおありになるに違いない。古田先生の長年にわたるご指導や、学内の諸問題を処理しつづけてくださったことに対して、改めて感謝の気持ちをお伝えするとともに、今後の一層のご活躍をお祈りしたい。